

ゼンダ・バード、 アフガニスタン！ —アフガニスタンよ、永遠なれ！—

甲斐 大策

聞き手：佐多保彦 株式会社東機買 代表取締役社長

佐多：甲斐さんも「ベシャワール会」の中村哲先生も石風社（福岡）からご本を出されていますが、九州にはユニークな方がおられるようですね。元気が湧いてきます。アフガニスタンと33年間生身でつき合っただけの甲斐さんにはなにか真実の話を伺いたいと、ついにご自宅にまで押しかけてしまいました。

このお部屋の絵はパーミヤーンの大仏の絵のようですが、これは実際にあったお話をもとに描かれたのですか。

甲斐：いえ、これは私の創造です。もう4年がかりで取り組んでいます。大仏が完成したころは黄金に輝いていて、落慶の奉祝行事があったに違いないので、その光景を再現しようと試みているのです。私が関心をもっているのは大仏そのものもそうですが、それを上回って、高さが55mもあるこんな桁外れなものを造らせた人間というのは、どんな心の持ち主だったのだろうということです。三蔵法師玄奘が訪れたときは、まだ全身が金色に輝いていたと記されています。

佐多：そもそもどういきがけてアフガニスタンに行かれたのですか。

甲斐：大連で過ごした幼少期の思い出と、画家であった父親の影響がやはり大きいでしょうね。また家に入り出していたのがアジア内陸に深く愛情をもつ詩人や文学者という方々ばかりでしたから、常に身近にアジアというものがあった。大学で仏教美術を専攻したこともあり、1969年にアフガニスタンへ向かいました。仏教美術はそれとして、とにかく人間が面白くて、なんとしてもこれからはアフガニスタンだ、という感じになっていました。

訪れる側のエゴとしては変わってほしくないと思っていますが、そこで生活している側からすると本当に厳しい世界なのです。例えば遊牧民が風に吹かれて歩いている姿は実にロマンチックな光景ですが、つき合ってみたらほとんどの人間が梅毒だったり、眼はトラコーマにやられていたり。彼らとしたら変わらなければたまらないわけですが、近代工業世界の視点だけで、あの国を理解することはできません。

30年以上アフガニスタンと接してきて得た結論は、我々日本人は「こうすれば生きていきやすい」というところへ全てを収斂させていきますが、彼らの世界は「こうでなければ生きていけない」という非常にぎにぎりのところで成り立っているということです。そうすると、「殺すか、兄弟になるか」という鮮烈な世界が出来上がる。中途半端は許されないのです。かといって、その二極が短絡しているわけでは



甲斐 大策 / かい・だいさく

1937年旧満州大連生まれ。早大文学部東洋美術史科卒。60年代後半からほぼ毎年アフガニスタンを訪れ、アフガン人と義兄弟の契りを結びイスラム教に入信。

画家として、また88年以来作家としてアフガニスタン、パキスタン、インドを素材にした作品を発表し続けている。その文学的個性は中上健次氏、五木寛之氏から絶賛を浴びる。

主な著書に『生命の風物語』『神・泥・人』『餃子ロード』（以上、石風社）など。九州福岡県在

ありません。実に繊細に人間をみつめた結果なのです。

佐多：甲斐さんにはたくさん「兄弟」がおられることでしょうか。

甲斐：ほぼ全ての民族に「兄弟」と呼び合う友がいます。タリバンが生まれる前の、まだ内乱状態にあったアフガニスタンで、友情の延長線上でランチャー（*1）を肩にかついで参戦したことがあります。カーブル（*2）を攻撃していたことですが、当然彼らにも私にもカーブルに友人がいる。だから「あの山を撃ていよう」と、皆でわざと的をそらして郊外の山ばかり撃っていたことがありました。そして村に帰ったら今度は周辺の地雷撤去です。話だけ聞いておられると怖いですが、我々の周りには野生のラベンダーがたくさん咲き、蜂が飛びまわっている。実に美しい光景です。若いムジャヒディン（聖戦士）が蜂を飼っていて、ラベンダーから採れた蜂蜜を瓶いっぱいにくれました。銃を片手に持ちながら、そのとき彼がこう言ったのです。「蜂は地雷を踏まないから働いてもらわないとね」と。むごさと優しさが同居する世界です。

佐多：イスラムについてはなにも知らず恥づかしいのですが、アフガニスタンについても昨年の9.11事件とその後の展開までは関心をもっておりませんでした。

甲斐：彼らの内面は実に豊かです。好戦的なイメージばかりでとらえるのは失礼で、少年でさえ詩の数行は暗誦しています。よく言うのですが、彼らの識字率は2、3割でも「識詩率^{ししりつ}」は10割だと。

佐多：「識詩率」とはすばらしい言葉ですね。

甲斐：中国の科举（*3）という制度をとっても、難しいということだけが話題になりますが、試験では詩への理解度などの比重がとても大きかったです。中国でもイスラムでも、詩を理解する心は伝統として今でもしっかりと生きています。

そして、移動系民族の文化は融通無碍^{ゆうつうむげ}というが、なんでも柔軟に取り込み、なにものにもとらわれない。パーミヤーンの大仏がその最たるものです。こんなものを作ったからには国が傾いたことでしょう。そして彼らは記録を残さない。パーミヤーンの大仏についてもなにも



バーミヤーンの大仏完成時の落慶奉祝図
(甲斐氏のご自宅にて)

伝承されていません。造る、壊れる、そして消えていく。とても潔い民族です。

佐多:男女共に非常に美しい人が多いですね。

甲斐:かの有名なアレキサンダー大王やペルシア中世の英雄ルスタムが遠征中にアフガニスタンでひっかかってしまったくらいですからね。アレキサンダーは東洋の文化にひかれ続け、ついにはマケドニアの衣装を脱ぎ、インド風の格好を装ったともいいます。

佐多:東洋の精神に直接触れて、全く違う人生の価値観をもって生きている人々の存在に気づいたのでしょうか。

甲斐:カーブルからインド西北部地域を支配していたギリシア人のミリンダ(メナンドロス)王が、今のパキスタンのタキシラでインドの高僧と哲学的な討論を交わしたという、有名な「ミリンダ王の問い」という問答集があるのですが、そこで西の論理と東の論理がぶつかりあう話があります。彼はさらに深く東方の思想を理解することになった…。そのような話がたくさんあります。

イスラムは、精神世界に重点をおいた、無限に抽象的な、手で触れ得ない形而上世界を目指します。たった1歳半の私の娘を伴ってアフガニスタンを旅したことがあります。肺炎をこじらせた娘のために“兄弟”が寝ないで祈り続けてくれたことがありました。私が礼を言うと、「娘さんの回復を願って祈っているわけではない。そのために祈るのもよいが、(それ自体は)意味のないことだ」との言葉が返ってきて衝撃を受けました。彼らの祈りは、娘の回復という現世的願望を超越したところにあるのです。この衝撃が、私をイスラムとアフガニスタンに本格的に踏み込ませるきっかけとなりました。

昨年からの一連の出来事は、言ってみれば「近代」の総決算だと思うのです。近代の対極にイスラムがある。アフガン・イスラムの「抽象」の世界が西欧的「具象」の世界とかみ合うはずがありません。

そして近代西欧がもたらした一番の弊害は国家という概念です。アフガニスタンは多民族を抱えたまま、1世紀ほど前にバクトゥン王朝が独立を宣言し、前後して英国と帝政ロシアの都合で国境が制定されました。諸民族の意向などは全く反映されずに、ただ国境線がひかれたのです。国家という枠組みを唯一無二の秩序とする結果、多くの民族が血を流しているではないですか。

「ゼンダ・バード」という言葉があります。パンザイというような

意味で、やたらと彼らは使います。ただ語源をたどると「生命の風」という意味のようです。「生命の風よ、吹け!」ですね。対ソ連戦のときに、私のそばで機関銃を撃っていた兄弟が叫び出したのです。興奮してくると彼は「ゼンダ・バード バクティア(*4)!」と顔を真っ赤にし全身をふるわせて、自分の出身地バクティアの地名を絶叫し始めました。それを聞いた途端、涙があふれてどうしようもなく、彼の故郷を思って、気持ちの高ぶりを禁じ得ませんでした。彼らには本当に近代西欧のいう国家の意識はないのです。

佐多:これからとてつもない額の援助が開始されますが。

甲斐:イスラム原理主義というよりも、それ以前に人間原理主義ありきだと思うのです。彼らは人間が根底にもっているあらゆるもの、善悪、愛憎、貴賤、聖俗全てを貧困と過酷な状況の中で保たざるを得なかった民族です。泥と干ばつしかない世界では原理しか残りません。あとは人と神だけです。粗暴、愚直、剛直、野卑、そして好戦的と周辺諸国が陰口を叩きますが、それは確かに全て正しい。しかしだからこそ今まで保たれてきた人間の誇りと輝きがあるのです。

巨大な資金がカーブルに入ってくることで、アフガン民族がどう変化するのが正直不安を感じています。援助金の3割が真水として使われればよい方だと言われていますし、まして農村部や山地にまで援助金が回ってくるのかと心配です。カーブルは一見豊かになるかもしれませんが、都市部と農村部の格差がますますはつきり現われてくることでしょう。

アジアの抽象性を知っていた者として、我が日本には近代西欧のもののさしをもっと融通のきく形にもっていける力が残っているはずです。例えば、バーミヤーンの大仏遺構をどうするのかという議論、破壊に至った真実の検証、それは日本が率先して進めるべきでしょう。

私はアフガニスタンから多くのことを学んできました。これからも誇り高い彼らと人生を共有し、彼らを人生の師とし兄弟として生きていきたいとの思いをいっそう強くしています。

(*1) 携帯可能なロケット砲の一種。

(*2) アフガニスタンの首都。メディアでは一般的に「カーブル」と称されているが、正式には「カーブル」。

(*3) 中国、隋王朝初期から実施された高等官資格試験制度。清王朝末期に廃止。

(*4) パキスタン国境に近いうアフガニスタン東部の州。

「唯識」という生き方(2)

横山 紘一



横山 紘一 / よこやま・こういつ

1940年、福岡県生まれ。70年、東京大学大学院印度哲学科修了。現在、立教大学教授。著書に、『唯識の哲学』『唯識とはなにか』『唯識』という生き方』『唯識・わが心の構造』『十年図・自己発見への旅』など。

「唯識」という仏教の思想を聞いたことのある方は、本誌の読者の中にはほとんどおられないと思いますが、この思想は、インド大乘仏教の第二期のもので、7世紀、あの小説『西遊記』の主人公で有名な三蔵法師玄奘によって17年の長きにわたるインドへの求法の旅の末、中国に伝えられ、それが奈良時代に日本に伝来し、以後現代にまで脈々と学ばれつづけてきた仏教の基本学です。

その唯識思想が昨年、日本でにわかに脚光を浴び始めてきましたが、唯識ブームの到来は私にとってはそれほど驚いた出来事ではありません。なぜなら唯識は仏教を超えてまさに21世紀にふさわしい、世界に通用する普遍的な思想であり、それは単に知的対象としての教理であるだけではなく、人間が迷うことなく生きていくための人生の指針となる思想であると私は固く信じていたからです。

ここで「唯識」の基本的教理を2、3紹介し、それに基づいて私たちはどのように道を誤ることなく生きていくことができるかを考えてみたいと思います。

1. 唯識無境

「唯識無境」とは、唯だ識すなわち心しか存在しなく、外界には事物は存在しないという教理です。

例えば、ここに3人の人がいて、共通の1本の松の木を見ています。しかしこれはあくまでも億測であって、間違っているのです。なぜなら私たち一人一人はそれぞれの心という宇宙の中に閉じ込められた存在であるからです。私たちは決して「自分の外」に抜け出して自分を外から眺めることはできないのです。だから私が見ている1本の木は、私の心の中の「影像」(観念とも言うことができます)であるのです。だから3人いれば3本の木があることになるのです。一步譲って松の木は外にあるかもしれないとしましょう。でも私は私の外に抜け出ることができないのですから、私はそれを直に見ることも触れることもできません。繰り返し申しますが、本当に一人一宇宙であってその閉じ込められた宇宙の中で右往左往しているのです。

この一人一宇宙を唯識の用語で「人人唯識」と言います。一人一人の世界、宇宙は、各人の深層の心(それを阿頼耶識と言います)が作り出したものであるという考えです。これは唯識の教理ではあるのですが、これまで述べてきたように静かに考え観察すれば、だれし

もが認めざるを得ない事実です。私はまず、すべての人がこの「一人一宇宙」という事実を事実として認めようではないかと最近強く訴えています。なぜならこの事実気づくならば、その人の生き方が違ってくるからです。

例えば「憎い人」という認識を考えてみましょう。私たちは普通、自分を離れて「憎い人」が眼の前にいると考え、その人を憎みます。だから「そこに憎い人があるから憎いという気持が起こるのだ」と考えます。でもここで静かな心で考え直してみましょう。もしも私の心の中に憎い気持が生じなければ、決して眼の前に「憎い人」という存在は現れてきません。すなわち私の側にある憎い「気持」と、そしてもっと厳密に言えば、憎いという「言葉」とが「憎い人」を作り上げているのです。この因果関係、因果法則を唯識では、「縁起の理」と言います。これは、

Aが有ればBが有り、

Aが無ければBは無い。

という簡単な法則です。いま挙げた「憎い人」について言えば、

憎いという「気持」と「言葉」が有れば「憎い人」が有り、

憎いという「気持」と「言葉」が無ければ「憎い人」は無い。

ということになります。

だから私たちは、なかなか難しいことですが、勇気をもってこの簡単な因果法則すなわち縁起の理に即して自己の心の中から憎む気持を無くすよう努力してみようではありませんか。そのように努力しようとする人が増えれば増えるほど、社会は浄化されていくことでしょう。

いま「憎い人」を作り上げていく要因として気持に加えて言葉をも挙げましたが、この「言葉」の働きに注目し、それがいかに迷いの世界を現出せしめているか説き示したのが「唯識」、広くは仏教であります。「唯識」は、「唯だ識しか存在しない」という意味ですが、換言すれば、

「すべての存在は言葉が作り出したものにすぎない」

という主張でもあるのです。すべての存在をいま分かりやすく「自分」と「もの」という2つの表現を用いて分類することにします。このうち「自分」とは、私、自己、俺、などと言っているものです。

そこでまず「自分」というものは存在しない、それは言葉が作り上げたものにすぎないという「唯識」の教理を考えてみましょう。

ここ数年、私は、ことあるごとに人と次のような問答を行っています。
まず、

「手を見てください。それはだれの手ですか」

と問うと、必ず質問された人は、

「自分の手です」

と答えられます。そのときさかさず

「では手は眼で見えますが、いまあなたが言った“自分”という言葉に対応するものがあるでしょうか。静かに観察してみてください」と再び問いかけます。そこで相手は考え始めます。しかし相手は困った顔をするだけで答えは返ってきません。なぜならその“自分”という言葉が指し示すものを決して発見できないからです。

そうです。“自分”というのは言葉の響きがあるだけなのです。その響きに惑わされて存在しない自分を単純に存在するものと考え、しかもすべての行動の主体として真ん中に据えて、「自分が、私が、俺が - 」と主張するのです。

このように唯だ言葉の響きがあるだけで「自分」といったものは存在しないという事実を、仏教は無我すなわち「我は無い」と表現します。このように自分が存在しないということに気づいたら、もう「自分」や「自分のもの」という判断を止めようではないかと私は最近私自身に言い聞かせ、同時に他人にもそれを訴えています。

肉体に対しても同じことが言えます。例えば食事を摂るとき、「自分」とはなにかを考えてみると、そのときこそ自分とは「生かされてある存在である」と気づくことができる絶好のチャンスです。例えばマグロのトロ口を食べるとします。そしてそのトロの味に意識を集中して、その味に成りきって味わってみましょう。そのとき、この一つの味が味わえるまでの過程に思いをはせるなら、そこに感謝の気持が湧いてきます。なぜなら、この美味しいトロの味を味わえることができるためには、もう数え切れないほどの縁が働いているからです。この刺身を作ってくれた料理人、その魚を捕ってくれた漁師、マグロそのもの、そのマグロを育ててくれた海、はるか何十億年前にこの地球に生じた命の一滴、地球、太陽、そして宇宙の果ての存在にまで因果の鎖を遡ることができます。それら一つがもしも無かったならば、この美味しいマグロの味を味わうことができないのです。さらに自分の肉体に眼を転じてみましょう。舌があり神経があり、ないしは60兆の

細胞が協同的に働いてこの味を味わうことができるのです。

このように「自己以外の数え切れないほどの他の力によって支えられ助けられて生きている自分」、これは事実です。「自己以外の他の力」と言いましたが、有るのはこの他の力だけです。この事実に気づき、それを知る智慧が増大すればするほど「自己」はどんどん小さくなっていき、とうとうゼロになってしまうのではないのでしょうか。

この事実を仏教は、「縁起の故に無我である」と説きます。前述した「縁起の理」に即してこのように「自分」を観察していくと、大きく生き方が変わってきます。それまでの「自分への執われ」が薄らいで、より自由に生きることができるようになります。

「自分」への執われに加えて、私たちにはもう一つ「もの」への執われがあり、それによって迷い苦しみ、ときには罪悪までも犯してしまいます。この「もの」には自分の肉体からはじまって身の回りの事物、自然、宇宙、さらに宗教で言う「神」までもを意味することになります。

「唯識」はそのようなものへの執われを「唯識無境」、すなわち、唯だ識すなわち心しかなく、「もの」は外界には存在しない、という教理でもって一刀のもとに切り捨ててしまいます。

いま「もの」として分かりやすい「自然」を例にとって考えてみます。例えば私が眼前に見る山は普通私の外に存在すると思われていますが、すでに述べましたように、私が見ている「山」は私の心の中にある影像であって、決してその影像を他人が見ることはできません。前の「自分」のときと同様、やはり言葉が「もの」を作り出してしまうのです。もちろん自然は外界にあると考えてもよい。しかし人間は「知識は力なり」という命題のもと、その知識とそれに基づく技術とで自然を征服し、現に見る地球環境破壊を引き起こしてしまったのです。いまその反動として「自然にやさしく」とか「自然と共生を」と叫ばれています。しかしそのように叫ぶ前に、人間同士が言葉によって捉えた「自然」ではなく、一人一人の心の中にある生の“自然”を、否、「自然」と名づけられる以前の「生のもの」「影像として存在」を静かにじっくりと感じ観察し、その上でみんなに共通の「自然」と調和して生きていくにはどうしたらよいかという問題を考えていくことが大切であると思います。何事に対しても、先ずは「思い」と「言葉」とを離れて、心の中で「それそのもの」に成りきることが肝要です。

睡眠時無呼吸症候群と向き合って

—患者体験談—

小野 隆彦

睡眠中になんらかの原因によって呼吸が止まる病気が睡眠時無呼吸症候群である。もちろんそのままでは苦しいので一時覚醒して息をし、すぐにイビキをかきながらまた寝込んでしまう。それを一晩中繰り返すのだが、そのような状況下にあるという本人の自覚がまったくないのが普通である。結局、睡眠の質が低下し、睡眠中の酸素摂取量が少なくなり、心臓への負担が大きくなる。心筋梗塞や突然死の危険性が健常人の数倍の確率という。また、昼間に当然眠気が襲ってきて事故につながる可能性も指摘されている(*1)。実は私もその睡眠時無呼吸症候群の立派な患者だった。数年かかって未だ治療中であるからベテランの患者であるともいえる。

さて、自らがこの病気の患者であることに気がついたのは、ひょんなことがきっかけだった。数年前、友人の医者とともに泊りがけでゴルフに出かけたときのことである。朝、同室だった彼が“このままでは突然死するぞ”と一言。何のことかと問いただすと、一晩中私のイビキがうるさくて眠れなかった、しかも呼吸が何度も止まるタイプの悪質なイビキとのこと。彼は整形外科医だから詳しいことは専門外だが、睡眠時無呼吸症候群の疑いがあるとのこと託宣だった。しかしながら、まったく自覚症状はなく、病気であるとの意識もなかったからそのまま忘れていた。その後、人間ドックを受診したときに相談してみると、やはりきちんとチェックしたほうがよいとのことで、新宿にある設備の整った駒ヶ嶺医院睡眠呼吸センターを紹介され、一日入院検査を受けることにした。

検査は非常にしっかりしたものだ。脳波と心電図はもちろん、目や身体の動きを測る筋電図、鼻への空気流量、血中の酸素濃度などなど、全部で20チャンネル以上のセンサを体につける(写真1・2)。それで本当に眠れるのかと心配したが、しっかり寝た。その間、隣の検査室では臨床検査技師の女性が寝ずの番をしてくれていた。

さて、その結果を聞いて驚愕した。なんと一晩に400回以上も呼吸が止まっている。一回の無呼吸は10秒以上続き、その間、血中の酸素濃度は80%以下と非常に低い。苦しいはずなのに、まったく覚えていない。脳波と筋電図のデータから、中枢性ではなく、舌が咽喉に落ち込んでふたをする格好になる閉塞性の無呼吸との診断である。そういえば、長時間眠らないとすっきりせず、会議中睡魔に襲われることもままあったが、これほどの重症とは思ってもいなかった。



写真1. 筋電図、空気流量などのセンサをつける
協力：駒ヶ嶺医院睡眠呼吸センター

原因は太りすぎて咽喉の軟口蓋にたるみがあることと、下顎が小さく歯の噛み合わせが深いので、舌が落ち込みやすいためとのこと。また、鼻づまりがひどく、常時口呼吸であることも関係していた。

その治療だが、受診した睡眠呼吸センターは内科系なので、まずはCPAP(Continuous Positive Airway Pressure、持続的陽圧呼吸療法)の適用となった。CPAPとはいわば空気ポンプで、加圧した空気を鼻に送り込む装置である。それによって、気道の閉塞を防ぎ、呼吸を持続させる。その加圧量を決定する必要があり、再度一泊検査を受けた。そのとき初めてCPAPの本体と、“象さんのお鼻”みたいな鼻マスクを見たわけである。本体からは結構な運転音がするし、鼻マスクは不格好でしかも装着すると身動きがとれないような感じがあった。

それでも臨床検査技師の“すぐ慣れますよ”の声に励まされ、なんとか就寝、翌朝の爽快さに驚いた。久しぶりの熟睡である。検査結果によれば無呼吸の回数が一晩で30数回と10分の1以下に激減している。このようにCPAPには即効性があり、確実な治療法であると実感した。加圧量は8cmH₂Oとの診断だった。

それからほぼ毎晩、CPAPを装着して就寝する日々が続けたが、毎日となると不安や不便も感じるようになる。一つは、鼻に加圧した空気が常時流れ込むので、息を吸うときはよいが、はくときにその圧力に抗するようにしなければならぬのかとの疑問である。一泊検査の当日は、夜中に目が覚め、息をはくのが苦しいという不安があったのも事実である。しかしよく考えてみると、まず加圧量は大気圧に対して1%以下であり、たいした圧力ではないし、口を閉ざして鼻からの空気で深呼吸を2 - 3回すれば体内の平均気圧が順応するので、排気も自然にできるようになる。ただし、鼻マスクをつけた後の口呼吸はできず、会話もできない。

その鼻マスクだが、当初使用したものはあまり上等なデザインとはいえなかった。たとえば、顔に装着するためのバンドだが、上下左右がはつきりせず、どこをどのように通せばうまく装着できるのかがよくわからなかった。また、鼻マスクそのものの形状が日本人向けではないのか、空気の漏れが多いなど、不便を感じていた。空気の漏れがあると効果が低下するばかりではなく、その漏れた空気が目に当たるとドライアイになって翌朝つらいことになる。また、装着時の



写真2 センサは全部で24チャネル。この状態で1泊する

ご面相は家族の誰からも不評であった。

いまひとつは冬場の空気乾燥である。CPAPからの空気も湿気がほとんどないので、鼻が乾くとともに、喉が痛くなる。これは部屋に加湿器を置くことでなんとかしのいだ。

さらに気になるのは、CPAP本体の動作音である。自らがイビキという騒音源なのだが、機械の騒音は寝室が静かなだけに耳につくものである。

つけ加えるとCPAPは、それを装着して寝れば睡眠時無呼吸が起らないようにする装置である。いわば眼鏡のようなもので、無呼吸を根本的に治す装置ではなく、装着しなくなれば無呼吸は再発する。毎日毎日、鼻マスクを装着することもつらいことはある。

さて、こうしてCPAPを使って1年半ほど経過したところで、耳鼻咽喉科を受診し、鼻と喉の手術を受けることにした。手術によって睡眠時無呼吸そのものが改善される可能性があるとの判断からである。全身麻酔による手術で、約1週間の入院であった。鼻の通りは劇的に改善されたが、咽喉の口蓋垂と軟口蓋を形成する手術はとてもしんどいものだった。咽喉の痛みで水を飲むのも苦労し、入院期間中は食事ほとんど摂れなかった。副次的効果は体重減少である。約10%、8kgの減量に成功して退院となった。

1ヵ月後、手術の効果を診るため睡眠呼吸センターでCPAPを装着せずに1泊検査を受診したが、一晩の無呼吸回数は100回以下となっていた。この時点で一度CPAPの装着を中断し、歯科領域での治療を試みた。これはマウスピースを装着することで、歯の噛み合わせを調整し、下顎を前に出して舌が咽喉に落ちにくい状況をつくる治療法である。

この療法は簡便でありながら一応の効果があるが、CPAPのような劇的な爽快感とまではいかないようだ。

この手術からさらに1年半が経過し、現在は歯科のマウスピースと最新型のCPAPであるFisher & Paykel HC-201を併用している。CPAPは毎日使用すべきであるとは理解しているが、疲れていたり、一杯飲んだ後などは面倒で、そのままマウスピースだけして寝てしまうこともある。また、泊りがけの出張には、さすがにCPAPは持っていくわけにもいかず、マウスピースだけで過ごすことが多い。

さて、そのHC-201CPAPは、噴出する空気を暖め、湿度を加える



写真3 CPAPと鼻マスクをつけて就寝

小野 隆彦 / おの・たかひこ
1951年、横浜に生まれる。74年、慶応義塾大学商学部卒業。89年、東北大学より工学博士の学位を受ける。91年より約10年間株式会社小野測器の代表取締役社長を務め、現在は顧問。現在、早稲田大学空間科学研究所客員教授、東京大学生産工学研究所研究員、株式会社サトー取締役。専門は音響工学。

参考文献：

- (*1) 『 野は直せる 』
(高崎雄司著・小学館文庫)
- (*2) 『 睡眠時無呼吸症候群 』
(本間日臣編集・克誠堂出版)

機能がついている。これが最大の特徴であるが、この機能にも改良すべき点がある。まず、部屋の気温が低いと鼻マスクに届くまでに水蒸気がホースの中で結露してしまい、水がたまる。CPAP本体より低い位置で寝ていると、その水がそのまま鼻に直行することになり、それだけでむせてしまう。加湿器の温度・湿度コントロールをより緻密にする必要があるし、呼吸に含まれている湿気を上手に使う工夫も考えるべきであろう。

一方、鼻マスクは非常によくできている。特に、装着ベルトの設計がよく、着脱が簡単で確実、したがって鼻マスクからの空気漏れも少ない。寝返りをするうても問題がない鼻マスクである(写真3)。

このHC-201CPAP本体が発生する騒音だが、これが結構な大きさである。運転中、本体下のゴム足に手を触れてみるとかなりの振動を感じる。モータからの振動を遮断できていないからで、これでは置く場所によっては共振してしまうだろう。空気の流れる音も気になるが、モータの運転音と振動の遮断はさほど困難ではないはずだから、早急に対策すべきだ。

さて、HC-201に限ったことではないが、取扱説明書について気になることがある。たとえばこの取扱説明書を開くと、見開きのたった2ページの間に「警告」と書かれた困みが4カ所ある。してはいけないことが書かれているのだが、全部で17行と相当な量である。それ以外の文章も「...しないでください」がとて多い。読んでみると使用することを躊躇してしまうような硬い文章である。PLC(製造者責任)との関係でそうなるのは理解するが、ユーザーフレンドリイとは言い難い。PLCの要件を満たすことは当然だが、取扱説明書の書き手に必要なことは、この装置をお使いになればあなたは幸せになりますよ、という思いやりの心であろう。

睡眠時無呼吸症候群の患者数は人口の約2%、200万人を超えらるといわれている。特に肥満との相関は高く、高血圧症や糖尿病との合併症も多い危険な病気である(*2)。だが、自覚症状がほとんどないのが特徴の病気でもあり、潜在的な患者を救うためにも医療現場からの情報発信を多くする必要があるだろう。いずれにしてもCPAP療法が即効的であり、確実な治療法であるから、使い心地のよい装置の開発と、内科、耳鼻咽喉科、歯科の連携による専門医療チームの活躍を期待するところである。

「マザーテレサへの旅」から 「風に立つライオン」へ

堂園 晴彦

20世紀が終わろうとする2000年の12月22日から28日まで、以前からぜひ行ってみたいと思っていたマザーテレサの施設に研修ボランティアとして行くことができました。

旅の目的は、個人でホスピス施設を開業し4年間頑張った自分へのご褒美と、たった一人で始めたマザーの活動がなぜ世界中に広がったのかを学ぶためでした。寒さで震えている多くの人を救うにはたくさんの毛布が必要であり、どのようにしたらたくさんの毛布を得られるのかを学びたかったのです。そして、そのことが学べれば、今後の自分自身を含め堂園メディカルハウス(以下DMH)全体の成長、発展に大いに役立つと思ったからです。

マザーテレサは20年以上前から尊敬しておりました。DMHを始めるにあたり基本的な考え方で影響を受けており、また、特別養子縁組(不幸にして生みの親に育ててもらえない子を、長い間子供に恵まれなかった夫婦に縁組する活動)を始めたのも、マザーテレサの考え方に強く影響を受けています。マザーテレサの「なくても与えよ」とか「傷つくまで愛せよ」などの言葉にも出会い、マザーの思いに深く共感しておりました。

カルカッタの空港から一歩外へ出た途端、そこはむせ返るようなエネルギーに満ち溢れていました。多分マザーテレサも外国からカルカッタへ帰ってくると、カルカッタという街からエネルギーをもらったに違いありません。犬も猫も人間も同じレベルでその日の食べ物にありつくことに必死で生き働いている一方で、路上に座り込んでいたり、寝転んでいる浮浪者も多数目立ちました。清潔好きな人は1時間でもカルカッタにいるのは苦痛かもしれません。しかし、個々人はわりと清潔好きで、歩道にある消火栓のようなところから出ている水で沐浴をしたり、床屋が路上やいたる所にあり、しょっちゅう髭をそったり散髪をしています。

大衆はほかの文化が入ってくることを本能的に拒絶しているようで、変わることはあまり望んでいないような気がしました。外来の文化が入ってくることを拒絶する身分制度の厳しい世界で、マザーテレサは1948年、38歳の時、第一歩をたった一人で踏み出したわけですが、その世界を目の当たりにして、テレサが最初のころに受けた誤解、偏見などがどれほどすさまじかったか、ほんの少しですが想像できました。もちろん、それと闘ったマザーの努力もです。

堂園 晴彦 / どうぞの・はるひこ

1952年鹿児島県生まれ。慈恵医大卒業後国立がんセンターレジデント、米国スローン・ケッティング癌研究所短期留学、慈恵医大産婦人科講師、鹿児島大学産婦人科講師を経て、96年「北風に震えて旅をしている旅人にそっとフロックコートをかけてあげよう」という思想を医療の中で実現するために「堂園メディカルハウス」を設立。理念は「手の温もりとおもてなしのシャワー」。

現在錦ヶ丘幼稚園・保育園理事長。NPO法人「風に立つライオン」理事長。
学生時代実験演劇室「天井桟敷」に在籍。自称「ホラリスト」。

マザーテレサの施設でのボランティア活動について説明します。

朝6時からミサ、お祈りが約1時間あります。ミサはマザーハウスの2階で行なわれます。ミサの参加は自由で、クリスチャン以外の人でも参加できますが、マザーテレサが人助けのためには宗教を超越したことが、次の演説からもわかります。

There is only one God and He is God to all ; therefore it is important that everyone is seen as equal before God.

I have always said we should help a Hindu become a better Hindu, a Muslim become a better Muslim, a Catholic become a better Catholic.(神はただひと方だけいらっしやいます。そして、その方はすべての人に対する神なのです。それゆえ、神の前では誰もが平等に見えることが大切なのです。

私はいつも言っています。ヒンズー教徒がよりよいヒンズー教徒になるように、イスラム教徒がよりよいイスラム教徒になるように、キリスト教徒がよりよいキリスト教徒になるように、私たちはお手伝いしなければならぬと)

早朝にもかかわらず、外の騒音はけたたましく、マイクを使用している説教さえ時々聞き取れないほどです。真夏でもクーラーはないそうですが、参加しているシスター(2、30人)、見習いシスター(5、60人)は敬虔にお祈りをしています。ボランティアも皆椅子ではなく床に座り、お祈りをします。床には薄い絨毯が敷いてあるだけです。この点もマザーテレサの方針かと思いました。

7時になるとボランティアの人のために朝食が出ます。パンやビスケット、クラッカーに、ハムやソーセージ、バナナ、それにとても甘いミルクティです。結構お腹一杯になります。食事の後は各自ボランティアをする施設に向かいます。私は1952年8月にオープンした「ニルマル・ヒルダイ(ニルマルは清純、ヒルダイは心の意味、死を待つ家とよく言われている)」でボランティアをしました。施設自体は古い建物で、シンプルです。電化製品は見つけられませんでした。ガスコンロはありました。患者さんは男性と女性に分かれ、それぞれ4、50人ほどで、簡易ベッドのようなベッドに寝ています。隣の人との距離は30cmほどしかなく、カーテンはありません。ずらっと並んでいます。医療に縁がない人は最初その光景に拒絶感を持つかもしれませんが、一部の



ニルマル・ヒルダイの入り口の看板



エプロンを着てボランティア
ニルマル・ヒルダイの玄関にて



インドの子供たち

観光客はさげすんだ目で、汚いものを見るように眺めていました。ニルマル・ヒルダイにいる人は一般社会から拒絶され、捨てられ、見向きもされないで死んでいく最も孤独な人たちですが、そのことを理解せず、ただ外見だけで判断すると、人間として大きなあやまちを犯してしまいます。マザー・テレサはこのような人々にこそ、愛を注ぎ、安らかに息を引きとってほしいと望まれたのです。その証拠に「死を待つ人の家」の入り口には

THE GREATEST AIM OF HUMAN LIFE IS TO DIE IN PEACE WITH GOD (人生の最大の目的は神とともにある安らぎの中で死ぬことである)

と、書いてあります。マザー・テレサはすべての人の中に神が宿っていると述べています。神は絶対的の愛ですべてを受け入れてくださる特別な存在だと思います。

私は、洗濯、物干し、食事の配膳、食器の回収、食器洗い、入浴介助、リハビリ介助をしてきました。洗濯は、汚物が多量について不潔な物は施設で働いているインド人が洗いますが、それ以外はすべてボランティアが中心にしています。これらの作業はほとんど手作業で、汚物がついた衣類や毛布を手や足で洗い、久しぶりに汗を流し、筋肉痛を心地良く感じながら洗濯物を籠に入れ屋上の屋根に干しました。そして、やせ細ってアバラが出ている人の体を手で洗っているうちに、涙が出そうになりました。

GIVE, GIVE, TILL IT HURTS YOU. (汝を傷めるまで与えよ)

壁に書かれているマザー・テレサの自己犠牲的な言葉が思い出されました。洗濯機を入れれば能率が上がると誰もが最初考えるでしょう。しかし、すべてを手で行なうところに意味があると実際自分で試してみわかりました。マザー・テレサは人間の手の持つ力をご存知だったのでしょ。人は不便だからこそ、自分の力の必要性を確認できるのかもしれない。

WE CAN DO NO GREAT THINGS ; ONLY SMALL THINGS WITH GREAT LOVE. (私たちは偉大なことはできない。偉大な愛を込めて小さなことができるだけだ)

マザー自身手作業をすることで実感されたことをシスターたちに伝えたかったのでしょう。キリストがらい病の患者さんになされたことと同じことをマザー・テレサはカルカッタで始めたのです。

施設にいる人が、身につけている物はシンプルなズボン兼オムツと上着、食事は丸いステンレスのプレートにカレーを添えたパンやお米がのっているだけでした。着る物は質素で、食事はご馳走ではありません。しかし、着る物はシスターやボランティアが心を込めて洗った衣類で、食事もおかわりができる量であり、シーツや枕カバーも毎日取り替えます。機械の力を一切排除し、人間の持っている手の力をメインにしている方針を見て、「手の温もり」を大切にしているDMHが目指している方向が決って間違いではないと確信しました。

ボランティアには世界中から若者が来ていました。彼らと話をしながら、ぜひ日本の医学部の学生をこの施設のボランティアに連れて来たいと思いました。世界中の同年輩の若者と接する機会を持つことにより、他の国の若者がどのような考えを持っているのか、自分の置かれている位置を確認できるでしょう。また、アフガニスタンやパキスタンで医療活動を17年間地道に展開している中村哲医師の施設に医学生を派遣し、中村医師のヒューマンズを学ばせたいとも考えました。昨年8月上旬帰国されていた中村医師に会いに博多に行き、派遣受け入れの協力を要請しました。中村医師に「何を一番学べますか」と質問したら、「男を磨けます」と答えられました。一体今の日本で男を磨ける場所があるでしょうか。また、男を磨くという言葉すら死語になっているような気がします。

経済力のない医学生を派遣する夢を実現するために、全国の医師など有志が資金を出し合って支えるシステムを考え、昨年11月NPO法人を設立しました。法人名はさだまさしのヒット曲にちなんで「風に立つライオン」と名づけました。この曲はアフリカで医療活動を展開した柴田統一郎医師をモデルに作られ、海外協力隊として活動している若者たちから国歌のように唄われています。全国から医学生の応募があり、最終的に8名を3月26日からボランティア研修第一陣として派遣することになりました。

今回NPO法人を設立し、学生を派遣する作業をするなかで、砂漠の中に一粒の砂金を見つけたような感動にいくつも出会い、私たちの魂の琴線は揺さぶられました。思わぬ方々からの寄付、応募学生の真摯な情熱、そして、神戸在住のインド人からの温かい申し出などです。次回は読者の方の魂の琴線を震えさせ、えもいわれぬ音楽を奏するような話をちりばめられればと思います。



「ブー」というくらい。それでも、鬼の首をとったように歓喜した。そこでさっそくいく人かの寮生に呼びかけて、尺八の発表会に招待することにした。

当日は、夕食後、私のいた明寮一番の部屋に、6、7名の友人が集まってきた。皆、期待に溢れて、うれしそうな顔をしている前で、おもむろに尺八をだして口につける。半ば目を閉じ、尺八を口にあって、じゅうぶん息を吸う。「ブー……ブツ」1分にもならぬうちに、息も音も切れておしまい。「発表終わり」というと、どおと皆が大笑い。「へえ!それだけか」がっかりした様子。なかには、「なんだ、だましたな」とフンガイするものもいた。私自身は、1ヵ月の大変な努力の成果を一発の音にこめて吹いたのだから、すましたもの。2、3人の仲間が「そんなのなら、オレでもできる。ちょっとかせよ」というので、こことばかり、「やってみろ。わかるから」と、尺八を手渡す。「スー」の音もでない。「みろ、オレはえらいんだぞ。ブーッと、いうんだから」と威張ってみせる。何人かが、いれかわっても、同じく「スー」と、空気が竹筒をぬけていくだけ。「やあ、むずかしいんだな」と首をかしげる。「それみろ、だから、発表会をしたんじゃないか」、もう一度そっくり返ってみせた。が、あとで考えてみると、やはり、少々ヘンな発表会だったな、と思い直したりしたものである。

これも、若き日の1つの挑戦といえるのだろうか。

参考:

1. 旧制一高入学(1942年4月)まもなく、宋渕禅師に出会う。
 2. 学徒出陣(1943年12月1日 - 45年8月15日)
 3. 東大復学(1945年10月 - 51年5月)カトリックの受洗
 4. 欧州滞在(仏、伊1951年 - 59年)カルメル修道院に入会
 5. 帰国(1959年10月)
- * 宋渕禅師遷化(1984年3月78歳)

P.G.I.のお知らせ

・ 三好耕三 写真展
CAMERA / 写真機

2002年4月3日(水)～6月1日(土)

なお4月27日(土)～5月6日(月)は臨時休館し、
最終日6月1日は「写真の日」にあたり特別開館致します。

写真家三好耕三が「写真」に興味を抱いた当時から愛用し、大切にしてきた「カメラ」を捉えたユニークな作品です。1972年の作品発表から30年後に被写体として見つけた「もの」は、最も身近な「小型カメラ」そのものでした。学生時代に使っていたものやゴミ捨て場で拾ったもの、埃だらけのジャンクショップで見つけたもの、知人から貰ったもので、それらすべてが作者と人生を共にしてきた、愛おしい形ある「もの」でした。

そのような「カメラたち」の顔は、それぞれの時代を反映するかのようには様々な表情をしています。

展示されるプリントは全紙大で、カメラは実寸の数倍の大きさに表現され、カメラの目となるレンズに焦点が合わせられています。約30台のカメラの「顔」を展示いたします。



・ 末穂佐英子 写真展
ヨーロッパアンサーカスの人々

2002年6月5日(水)～28日(金)

フォト・ギャラリー・インターナショナル

東京都港区芝浦4-12-32 TEL.03-3455-7827 FAX.03-3455-8143
JR田町駅芝浦出口(東口)より徒歩10分 [入場無料]

【営業日】月～金 【休館日】土・日・祝日

【営業時間】11:00～19:00

* P.G.I. についての詳しい情報はホームページ(<http://www.pgi.ac>)をご覧ください。

表紙の言葉



写真: クリス・スティール / パーキンス
アフガニスタン、1994年
写真提供: マグナム・フォト・東京支社

日没時、ジャラバード郊外の橋の上で警備につく若い兵士

「…兵士たちは全員若い男で、なかには十代になったばかりの少年もいる。みな家族と離ればなれだ。貧しくて教育も受けていないが、おおざっぱで、温かくて、親切な人びとである。世界中どこかの戦場の若い兵士もそうであるように、彼らもまた冒険心、お金、食べ物、そして部族への忠誠心のために闘っている。せっぱつまった心晴から、混乱した単純なスローガンのために闘っているのだ。兵士たちがスローガンの意味を正しく理解しているとはいえないし、いずれそのためにこのなかの何人かは死んでゆくというのに。イスラム、純粋なイスラムのために。戦闘の理由はそれで十分なのである…」

写真集『アフガニスタン』クリス・スティール = パーキンス (晶文社刊)より

悪性脳腫瘍、 グリオブラストーマの治療について

—その遺伝子治療も含めて—

米川 泰弘



米川 泰弘 / よねかわ・やすひろ

1939年、三重県津市生まれ。64年、京都大学医学部卒業。

京都大学医学部助教授、国立循環器病センター・脳神経外科部長などを経て、93年より、チューリッヒ大学脳神経外科主任教授。

“ベートーベンのピアノコンチェルト第5番の音楽が楽しめなくなった。分からなくなった”というのが今回のテーマのグリオブラストーマを発病した、49歳で働き盛りの内科医の第一症状であったという。グリオブラストーマは日本語で神経膠芽腫といい、脳腫瘍全体の中で10%強を占める最も悪性の腫瘍である。今のところ残念ながらどのような治療をしてもやがては死に至る病とされており、その平均余命は発病後わずか1.5年となっている。従って治療にあたる医師が常に忘れてはいけない大切なことは、患者に残された貴重な日々の、クオリティオブライフ(以下QOL)をできるだけ維持すること、またはこれをできるだけ高めることである。自ら開業医、ホームドクターとしてこれまで第一線で活躍、たくさんの患者を診察治療してきたB医師は、職業柄この病気の予後についても、近いうち自分に訪れるであろう(悲観的にならざるを得ない)結末についてもよく承知していた。彼が自身の脳のMRI写真を携えて私の診察時間に現われたのは1996年の4月のことであった。それを見てみると明らかに直径4cm強の腫瘍が右の側頭葉に発生していた。右利きの人の右側頭葉は通常あまり大した機能を持っていないとされているが、このように、音楽を理解して楽しむことにも大きな意味を持っているのを実際に確認したのは初めてである。腫瘍は造影剤を取り込んで明らかにエンハンス(増強撮像)され、また右大脳半球に血液を送りこんでいる重要な中大脳動脈本幹がその腫瘍の中に巻き込まれているのが認められた。外来来院後2週間のちに私の行った手術では、マイクロサージェリー(顕微鏡下での手術)によって腫瘍の全摘出を施行した。この際に前述の問題個所である中大脳動脈にしっかりとまとわりついた腫瘍部分は、超音波破砕器を用いてできるだけ根治的に取り除いた。腫瘍切除中に中大脳動脈が損傷されると、片麻痺、視野障害(同名性半盲)などを引き起こし、腫瘍は切除されてもQOLは極端に悪くなるので細心の注意を払った。術後は当科の治療方式にのっとり放射線治療を行った。

2002年の今日この稿を書くにあたって、今は亡きB医師のカルテを病院地下にある死者のカルテ倉庫(Totenarchiv)から取り寄せたのであるが、その中に彼からの私に宛てた私信がある。手術から4ヵ月経ち放射線療法も終えて闘病も小康状態という時点で書かれたものである。手術後集集中治療室にて麻酔から覚めて気がつき、

私から手術の経過と迅速標本の結果を聞いたこと。五体を満足に動かすことができ、ひと安心したこと。翌日チェックのためのCTを撮りすぐに歩く練習をしたが、うまくいったこと。そのまた翌日曜日であったが、冒頭に述べた彼の最も愛していたピアノコンチェルトのCDを聞いたところ、この音楽が心の琴線に深く触れ、聞きながら身体を揺り動かしていることに気づき嬉しくて涙が出たこと。手術前はこの音楽を楽しむことができないという慰めようのない地獄に陥っていたが、それから解放されたのは最高に素晴らしい体験であったこと。その後着々と体力も回復して、よいQOLを楽しみ、徐々に心の負担を軽減して長年のしがらみから解放されていること。開業していた医院を引き継いでくれるよい後任も見つけることができたので、以前不可能であったこのようなことができること。などなどが記されていた。

その彼も、しかし2年後には再発のために再手術をすることになった。その手術の際、QOLを考えて片麻痺になるのを避けるために意図的に取り残した部位には、術後定位的に放射線を少量追加照射した。その後化学療法を2クール行ったが、半年後に局所に浸潤性の再発を認めた。この頃には視野障害(同名性半盲)が起こり、そのため新聞や書物を読むことが困難になった。さらには左手の失行症状(自分の手をどのように動かしたらよいかわからない状態)のため独りで服を着ることができなくなり、また焦点性癇癇発作がたびたび起こるようになった。その上に精神神経症状も加わってきた。第3回目の手術をするかどうかについて本人及び家族とよく相談したのであるが、QOLの観点からも延命の観点からもあまり意味がないという結論に達し、そのまま化学療法、対症療法を続けたが、初回手術からちょうど3年の闘病で彼はその生涯を閉じることになった。以上がB医師のグリオブラストーマの経過である。彼の場合は通常の平均余命の2倍以上生きることができたのであるが、一般に5年生存率は5%前後とされている。従って手術を行うことの意義は、主に患者のQOLの維持あるいは向上にあると考えてよい。

ところで今、遺伝子治療が各種の難病に試みられている。このグリオブラストーマに対しても同様で、私どもも非常に大きな期待を抱いてヨーロッパの共同臨床研究に参加した。当科からは研究室の室長と病棟主任(Oberarzt)の一人が臨床研究遂行の任に当た

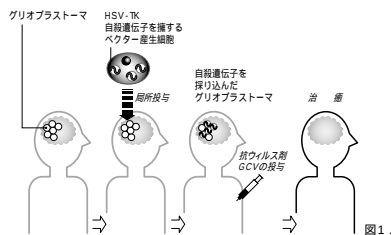


図1. グリオブラストーマの遺伝子治療のシエマ

原図(日経サイエンス 1997年9月号46頁)の説明を多少改変したものの。

った。ちょうど山口大学から留学していた安達直人博士も献身的にその仕事に貢献した。結果的には期待したほどの効果は得られなかったものの、その安全性が確認され、また症例によっては著効を得たという事実が今後への期待につながろう。詳しくは安達博士らの論文に明らかにされているが、その理論的な治療方式は図1に示すごとくである。レトロウィルスベクターを用いて抗ウィルス剤(GCV)に反応する自殺遺伝子(HSV-TK)をまず腫瘍細胞に導入しておいて、その後GCVを全身投与することによりその自殺遺伝子に働かせ選択的に腫瘍細胞を殺そうというものである。実際的には、腫瘍再発例の手術時において、腫瘍摘出した後の周りの個所(まだそこにはその後の再々発の原因となる腫瘍細胞が残っていると想定される)にベクターを産生する細胞(マウス由来)を含有する液を、ある一定の深さで計100か所均等に注入する方法である。さらに手術後約2週間目から上記のGCVを2週間にわたって静脈注射し、ウィルスに感染してHSV-TK遺伝子を保有している残った腫瘍細胞を殺そうという試みである。理論的、方法論的に優れたはずのこの方法が、なぜ予期した効果を伴わなかったのかは専門家間で検討中であるが、いずれ形を変えて再登場するのは間違いないと思われる。

現在この病気に対しては他にも種々の手術・治療法があり、その効果が謳われている。例えばレーザーを用いた温熱療法、放射線免疫療法、ある種の色素を利用して腫瘍摘出の範囲を確実にする方法、既存の化学療法剤とはまた違った新薬の開発など、挙げていくとつきりが無い。新聞・雑誌やインターネットからのあふれる情報に接し、当然のことながら右往左往する患者やその家族の気持は重々理解できるのだが、時としてその対応に難渋することもある。中にはまだ長期追跡調査の結果を伴っていないものや、責任の所在に欠ける報道も多いのであるが…。

さて最後に、忘れられないグリオブラストーマの症例の一例をここに紹介する。私がチューリッヒに着任後間もなくの1993年の初め、当時53歳であったこの女性は夫が経営する消火器を扱う小さな会社の秘書をパートでしていたのだが、“集中力がなくなった、物覚えが悪くなった”とのことで受診に来た。早速精密検査をしたところ、左側頭葉に直径約5cmものグリオブラストーマ(図2a)ができていることが分かった。手順としてまずマイクロサージェリーによってこの



図2a



図2b

2回の手術と、1回の放射線治療で以後10年近く再発なしのグリオブラストーマの稀な症例(本文参照)

a 第1回手術前のMRI前像。悪性大脳半球側頭葉内に直径5cm大の典型的なグリオブラストーマを認める。これを全摘手術後、放射線照射を行った。

b 第2回手術前のMRI前像。8ヵ月後の再発は局所及びそこから離れた脳幹部に転移した計2つの腫瘍を認める。この2つの腫瘍を摘出した後は再発を認めていない。

大きな悪性腫瘍を全摘出したのであるが、その際大切な機能のある左半球なので、腫瘍を取るための侵入口の設定には特に注意を払った。術後彼女は幸い機能障害を残さずことなく回復して退院した。しばらくの間通院で放射線治療を受けた後、もとの生活に復帰することができた。しかし初回手術より8ヵ月後に再び集中力がなくなり、計算能力が落ち、言葉を見つけるのが難しくなって来院した。精密検査の結果腫瘍の再発が認められた。一般に再発の場合はほとんど前と同じ場所に発生することが多いのであるが、彼女の場合それ1つだけでなくもう1つの転移を伴っていた。つまり今度は以前に腫瘍のあった同じ左側頭葉に直径4cmのものが発生しただけでなく、脳幹近くの小脳脚にも直径2cmの腫瘍ができていたのである(図2b)。このように“飛び火”して転移することは脳腫瘍では稀である。脳脊髄液の流れに乗って側頭葉から転移したのと考えられた(Abtropfmetastase, seeding)。今回もマイクロサージェリーによる手術でそれぞれの腫瘍を新しい神経脱落症状を引き起こさずことなく摘出することができた。術後彼女はまたもとの主婦兼秘書の仕事に復帰した。それから、既に最初で放射線治療を施した後であるので、定期的に外来で経過観察のみをしている。副作用の少ない化学療法も行っていないが、幸運なことに再発の徴候はなく、毎年御主人と連名でクリスマスカードを送ってくれている。前述の平均余命15年をとうくに超え、発病以来もう10年にもなろうとしている。このように特別なことをしないのに、この死に至る難病から治癒した例が稀にある。なぜ再発がでないのか、今の医学では説明不可能である。

私はこれまで数多くのグリオブラストーマを扱ってきた経験から、この病気を診断されて失意の患者とその家族に、“まずQOLを考えると、そして上記のような例外もあるので決して諦めない、never give upの精神で病気と闘うこと”を勧めている。近代の外科の礎を築いた16世紀のフランスの外科医 Ambroise Paréの“Je le pensay, et Dieu le guarit.”(「われは処置し、神はいやしたもう」という言葉がある。これは現代にも通ずるところがある。処置にあたる私も外科医は、自分の技術や知識を過信することなく謙虚な姿勢で日々研鑽し、また当事者たちを励まし支えとともに医師自らも決して諦めることなく責務を果たすことが大切であると考えている。

フランスのワイン法(A.O.C.)

—ブルゴーニュの場合—

横山 弘和

昨年、我々が口にする重要な食物である牛肉が安心して食べられないという問題が持ち上がりました。狂牛病という恐ろしい病に冒された牛が日本で発見されて大騒ぎになり、最近では食肉の流通過程における大手食品会社の不正な行為が明るみにでて、消費者に不安をもたらしました。また、一連の騒動に対する行政の対応の甘さも指摘され、大問題になっています。

過去、フランスのワイン業界でもこのような問題が起きたことがあります。結果としてそれが不正を取り締まり、消費者を守るための厳しいワイン法を制定するきっかけとなりました。そこで今回もソムリエの旅行記をお休みして、ワイン法制定までの経緯についてお話ししたいと思います。

原産地統制呼称ワインについて

フランスでは1935年に Appellation d'Origine Contrôlée(統制法律)という、俗に A.O.C. 法とか、A.C. 法と省略される法律が、ワイン産業を取り締まるために施行されました。それ以来、フランス・ワインの瓶に貼られるラベルにはワイン名、産地名、生産者名、収穫年などが表示されるようになりました。現在、皆さんが買い求められている輸入フランス・ワインのラベルの多くに Appellation Chambertin Contrôlée とか Appellation Meursault Contrôlée といった表示を見かけられると思います。これは中身のワインの原料ぶどう栽培地域、ぶどう品種、最高生産量、最低アルコール度数、醸造法などの細かい規制を満たし、I.N.A.O.(Institut national des appellations d'origine)という原産地呼称権管理協会「ワインの生産を監視し管理する」の検査に合格したワインです。また、原産地名が地方(Bourgogne)、地区(Côte de Beaune)、村(Pommard)、畑(Corton-Charlemagne)と地区が小さくなるにつれ品質の高いワインとされています。

A.O.C.の主な条件:

1. 原料であるぶどうは生産地栽培のぶどうが100%であること。
2. ぶどう品種の使用可・使用不可の規制。
3. 収穫期によるぶどうの糖度の規制。最低アルコール度数の設定。
4. 品質の良いぶどうだけをつくるため、1haあたりの収穫量を規制。



横山 弘和 / よこやま・ひろかず

1930年兵庫県生まれ。65年ホテル・オークラ(東京)入社。95年に退社するまでソムリエとして30年間一貫してワイン関係業務に従事する。

88年11月ブルゴーニュ・シュヴァリエ・デュ・タートヴァン(利き酒騎士)叙任。現在佐多商会業務室在籍。

5. 原料であるぶどうは、樹齢3年以上のものであること。
6. 産地により、ぶどうの樹の剪定法など栽培方法の規制。
7. 産地により、ロゼワイン、発泡性ワインには特別の規定を設ける。
8. 発泡性ワインの熟成条件や、ボージョレなどヌーヴォーの発売日の限定。
9. すべてのA.O.C.ワインの試験検査の実施。

A.O.C.法の制定

さて、A.O.C. 法なるワイン法が実施される経緯は古く、19世紀の終わりにまでさかのぼります。その頃のフランスのぶどう園は、ぶどうの根や葉を食い荒らす害虫フィロクセラの被害をうけ、ほとんど壊滅状態にありました。そこで偽造ワイン産業が現れました。偽造ワイン業者は外国から濃縮グレープジュースを輸入し、水や砂糖、さらに人工着色料を混ぜ、ぶどう酒と称して売りさばきました。これが行き過ぎて動物の血液や化学物質、工業用アルコールなどまで混入され始めました。1905年頃には、進歩しつつある科学上の見地からも危険な状態と考えられ、また同時に復興しつつあるぶどう園で若い苗木が植付けられ純粋なワインが造られ始めたこともあり(若い樹からできるワインは必ずしも上等な代物ではなかった)、政府は消費者を守る目的から1905年8月1日に新しい法令を定めたのです。これが、近代社会で最初のワインを地理的産地名で呼ぶ正式な法律制定となったのです。

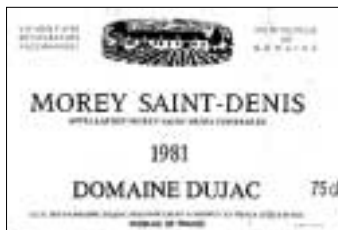
しかし、この1905年のワイン法は欠陥の多いものでした。数多い地方のワイン産地を地理的に区切って境界を定めるのは難しいことでした。しかも、この法律では生産者を取り締まることはできませんでしたが、ワイン商人を取り締まるほどの効果はありませんでした。

その後、1919年に定められた新法令では、例えばアルザスで造られたワインをブルゴーニュと呼べないことをはっきりさせるなど、さらに細かい取り決めを設定して、さらに1920年から1934年にかけて多くの村やぶどう園の境界が正式に定められることになりました。その間、優秀なワイン生産者と不正を行うワイン商人との対決は続き、法令が整備されたことを機会に、それまで生産者はワインを樽詰めで売り、業者が瓶詰め作業していたのを、現在主流となっている "domaine-bottling (シャトー元詰め)" に切り替えることになりました。



地方名ワイン

アペラシオン・ブルゴーニュ・コントローレ
APPELLATION BOURGOGNE CONTRÔLÉE



村名ワイン

アペラシオン・モレイ・サン・ドニ・ヴィラージュ・コントローレ
APPELLATION MOREY SAINT-DENIS CONTRÔLÉE



特級畑名ワイン

アペラシオン・ロマネ・サン・ヴィヴァン・コントローレ
APPELLATION ROMANÉE-SAINT-VIVANT CONTRÔLÉE

現在のA.O.C.法への動き

1919年制定の新法令にはまだ手振かりがありました。各ワイン産地に適したぶどう品種の限定をせず、ぶどう畑での一定の広さに対する収穫量の制限もありませんでした。結果として交配された雑種のぶどう品種や、栽培に手のつかない品種がはびこり、新しい法令は消費者を守るとはまだ言いがたいものでした。

1920年代になり、やっとワイン産地別のぶどう品種を指定することの重要性が理解されます。1927年7月22日の法令では、その地方の裁判所がどのぶどう品種がA.O.C.ワインの規格にふさわしいかを決定し、交配品種や簡略品種は否認されることが決定しました。その少し後、1930年になるとブルゴーニュではピノ・ノワールをこの地方の高級品種として正式に限定し、ガメ種その他の品種の使用は事情に応じて認めることとなりました。

その後1935年に定められたA.O.C.法は必要に応じて修正され、現在も基本の形はそのまま引き継がれています。そしてその他のワイン生産国でもこの法を手本にワイン法を定めています。しかし、現在これでワイン業界の不正が完全に取り締まられているかという必ずしもそうとは言えません。収穫年により足りないアルコール度数を砂糖を加えて人工的に上げる、ヴィンテージの表示をごまかす、そしてなにより過剰生産がよく問題になります。不正がばれて何代も続いた名門ドメーヌの破綻も報じられています。よく耳にしますが、ボージョレの年間総生産量であるはずの量が、毎年パリとリヨンの2大都市だけでそれぞれ消費されているという話があります。それぞれの都市で総生産量が消費されているということですから、それだけで既に総生産量が2倍になっていることになります。では、日本にくるボージョレはどこでとれたものなのでしょうか。冗談話ならよいのですが。

また、こんな話も話題になりました。何年前か、世界的なワインブームの頃、ロンドンのワイン商人がフランスからブルゴーニュ・ルージュというワインを大量に仕入れました。比較的低価格の日常ワインですが、一向に売れず在庫を抱えて大困りでした。そこで親しいワイン通の友人にどうしたものかと助言を求めました。その友人はそんな簡単なこと、知恵をつけてくれました。それは密かに、同じブルゴーニュでも位の高い村名ワイン、ニユー・サン・ジョルジュのラベルを手に入れ、張り替えて店に並べるといふものでした。ワインは

数日の内に全部売りさばけました。しかし、すぐに警察の調査が入り、不正がばれて多額の罰金を課せられてしまいました。せっかくうまくいったのに、彼は1つの誤りを犯したのです。ワインの値段を上げずにそのまま売ってしまったので、不思議に思った1人の客が調べて密告したのです。ラベルを張り替え値段も上げて売れば案外在庫がさばけて、誰にも知られることなく一儲けできたかもしれません。

冒頭に述べた大手食品会社の不正行為を考えても、どんなに法を定めて取り締まりを強化したところで、生産過程での不正と営利主義を抑えることができるのは、結局生産者の品質を優先させる意思と誠実心しかないのかもしれないかもしれません。

最後に追記として、A.O.C.ワインの下にある3つの格付けについて触れておきます。

- V.D.Q.S. (原産地呼称上質指定ワイン)

A.O.C.よりゆるい規制で造られる。

プロヴァンス、ラングドック・ルーシヨンが主な産地。

- Vins de Pays (地ワイン)

田舎のワインでお買い得。

- Vins de Table (ヴァン・ド・テーブル)

主にスーパーで買える日常ワイン。

それぞれ、ラベルに表示することが義務付けられています。

なお、シャンパンは高級ワインであるにもかかわらずラベルにA.O.C.の表示がないことにお気付きになられた方も多いと思います。シャンパンはシャンパン自体が呼称の証明で、シャンパン地方以外のスパークリング・ワインはシャンパンと呼べないことになっているためです。

ブルゴーニュへ、ようこそ

中世がまだに思っているブルゴーニュへいらっしゃいませ。
種上の純潔を生み出すぶどう畑、グルメスランの数々、
中世そのまの街並み、美しく広がる大地や、小さな村々、
豊かな生命力がはだのめり、産産する地方、
それがブルゴーニュです。

お問い合わせ
(株)近多商会業務室 担当：岩沢
Tel. 03 3582 5087

